

キリストの証人として

(使徒の働き3・1〜10)

一、「美しい門」で

1節に「ペテロとヨハネは午後三時の祈りの時間に宮に上って行った。」とあります。ユダヤ人は「朝の九時」と「午後三時」を祈りの時としていました。エルサレムの神殿では、この時間に清い動物の犠牲がささげられていました。敬虔なユダヤ人は「朝の祈り」と「夕方の祈り」に「正午の祈り」を加え、朝・正午・夕と、日に三度、主の前に祈っていました。ペテロとヨハネは午後三時の祈りの時間に宮に上って行った」とは、ユダヤ人としての行いです。教会が生まれればかりの頃、使徒たちはユダヤ人として日々の生活をしてきたことが分かります。すなわち、教会はユダヤ教の一派でした。続いて2節です。《すると、生まれつき足のなえた人が運ばれて来た。この男は、宮に入る人たちから施しを求めするために、毎日「美しい門」という名の宮の門に置いてもらっていた。》とあります。ユダヤ人は、律法(トラー)に従い、困っている人に施すことを務めと受け止め、それを行っていました。ここに書かれている出来事の場合は、「美しい門」と呼ばれていた所でした。「美しい門」と呼ばれるくらいですから、よほど美しかったのであり

ましよう。ヨセフスと言う紀元1世紀のユダヤ人で、歴史家・政治家として活躍した方が「ユダヤ戦記」の中で、「美しい門」のことについて書いています。《十の門のうち九つの門は(略)表面全体に金と銀がかぶせてあった。しかし聖所の外の門だけはコリント様式の青銅であった。銀の板金でおおわれ、周囲を金の板金にはめこまれている門よりはるかに価値のあるものだった。》このコリント様式の門が「美しい門」だったようです。

二、「金銀は私にはない」

《生まれつき足のなえた人》が神殿に入ろうとする。ペテロとヨハネを見つめて、施しを求めました。3節です。《彼は、ペテロとヨハネが宮に入ろうとするのを見て、施しを求めた。》とあります。男は、5節に《男は何かもらえると思つて、ふたりに目を注いだ。》と書かれているように、この二人が自分に何か良いものをくださるであろうと期待していました。ところが、ペテロの方が言いました。6節です。《すると、ペテロは、「金銀は私にはない。しかし、私にあるものを上げよう。ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい」と言つて、》とあります。そして7節、8節です。《彼の右手を取つて立たせた。するとたちまち、彼の足とくるぶしが強くなり、おどりが上がつてまっすぐに立ち、歩

きだした。そして歩いたり、はねたりしながら、神を賛美しつつ、ふたりといっしょに宮に入つて行った。》とあります。「金銀は私にはない」とは、いい言葉ですね。教会の出発点は、「金銀は私にはない」でした。したがって、お金に頼ることができません。では、何に頼ったのでしょうか。と言うよりも、どのような財産を持っていたのでしょうか。それは、イエス・キリストを知っているという財産です。イエス・キリストを知るとは、最高の財産です。

三、教会の財産

教会の出発点は「金銀は私にはない」でした。が、たいせつなものを持つていました。それは、イエス・キリストの御名です。今一度、6節から7節前半を見てまいります。《すると、ペテロは、「金銀は私にはない。しかし、私にあるものを上げよう。ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい」と言つて、彼の右手を取つて立たせた。》とあります。かつて主イエスは中風の男に「起きて、床を担いで歩きなさい」(↓マルコ2・9、マタイ9・8)と語られ、男はいやされ、立ち上がつて歩き出しました。その同じことが、ペテロとヨハネを通して行われました。生まれつき足のなえた人は、7節後半から9節に書かれているように、《するとたちまち、彼の足とくるぶしが強くなり、おどりが上

つてまっすぐに立ち、歩きだした。そして歩いたり、はねたりしながら、神を賛美しつつ、ふたりといっしょに宮に入つて行った。人々はみな、彼が歩きながら、神を賛美しているのを見た。》のでした。彼はイエス・キリストの御名を信じて救われたのです。ひよっとすると、その後、季節の変わり目に体調を崩して足とくるぶしが痛くなったかもしれない。あるいは歳を重ねて、再び歩けなくなつたかもしれない。もし、いやしそのものに重きを置くなら、「なんだ、せっかくいやさされたのに、あのいやしは何だったのか」と疑いを持つようになることでありましょう。あるいは、「あなたの信仰が足りないから、元に戻つてしまったのです」と「おせっかい」を言う人が現れるかもしれません。あるいは「いやしが続くためには、ああしなくてはならない。こうしなければならぬ」と言う「うるさい人」が現れて、変な方向に引張つて行くこととするかもしれません。

ですが、極論を申しますなら、イエス・キリストを信じたなら、それだけで十分です。罪の赦しをいただいて、神との交流が始まり、永遠のいのちをいただいたのですから。

そのように思っている人は、神の恵みを知つた人です。そのように思える人はキリストの証人とされています。